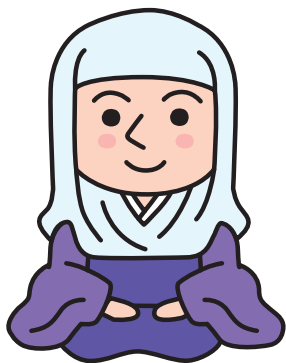


このまちの歴史に名を残した人物

| 若 | 狭 | お | ば | ま |

| 人 | 物 | 學 | 事 | 始 |

01. 八百比丘尼 はっぴやくびくに
02. 行基 ぎょうき
03. 良弁 和尚 ろうべんおしょう
04. 坂上 田村麻呂 さかのうえのたむらまろ
05. 二条院讃岐 にじょういんのさぬき
06. 世阿弥 ぜあみ
07. 一色 義貫 いっしきよしつら
08. 垂烈進卿 あれつしんけい
09. 武田 信賢 たけだのぶかた
10. 武田 信親 たけだのぶちか
11. 武田 元信 たけだもとのぶ
12. 武田 元光 たけだもとみつ
13. 潤甫 周玉 じゅんほしゅうぎよく
14. 妙玄尼 みょうげんに
15. 丹羽長秀 にわながひで
16. 月甫 清光 がっぼせいこう
17. 京極 マリア きょうごくまりあ
18. 英甫 永雄 えいほえいゆう
19. 浅野 長吉 あさのながよし
20. 京極 高次 きょうごくたかつぐ
21. 常高院・お初 じょうこういん・おはつ
22. 木下 勝俊 きのしたかつとし
23. 春日局 かすがのつぼね
24. 小少将 こしょうしょう
25. 新大夫 しんだゆう
26. 川崎 かわさき
27. 外山 とやま
28. 酒井 忠勝 さかいただかつ
29. 京極 忠高 きょうごくただたか
30. 行方 久兵衛 なめかたきゅうべえ
31. 松木庄左衛門 まつのきしょうざえもん
32. 松浦 三十郎 まつうらさんじゅうろう
33. 京極 竜子 きょうごくたつこ
34. 面山 和尚 めんざんおしょう
35. 木崎 惕窓 きざきてきそう
36. 木崎 雅興 きざきまさおき
37. 杉田 玄白 すぎたげんぱく
38. 中川 淳庵 なかがわ じゅんなん
39. 酒井 忠貫 さかいただつら
40. 酒井 伊織 さかいいおり
41. 綱女 つなじょ
42. 伴 信友 ばんのぶとも
43. 浅利 又七郎 あさりまたしちろう
44. 東条 義門 とうじょうぎもん
45. 酒井 忠義 さかいただあき
46. 梅田 雲浜 うめだうんぴん
47. 桂 小五郎 かつらこごろう
48. 山川 武直 やまかわたけなお
49. 幾松・木戸 松子 いくまつ・きどまつこ
50. 和田 維四郎 わだつなしろう
51. 山口 嘉七 やまぐちかしち
52. 平井 政適 ひらいまさかつ
53. 西田 當百 にしだとうひゃく
54. 原田 祖岳 はらだそがく
55. 田中文蔵 たなかぶんぞう
56. 山川 登美子 やまかわとみこ
57. 佐久間 勉 さくまつとむ
58. 上田 三平 うえださんぺい
59. 尾崎 放哉 おざきほうさい
60. 儀峨 徹二 ぎがてつじ
61. 大木 吉太郎 おおききちたろう
62. 山本 和夫 やまもとかずお
63. 松木 庄吉 まつきしょうきち
64. 梅沢 濱夫 うめざわはまお



01

八百比丘尼 はっぴやくびくに

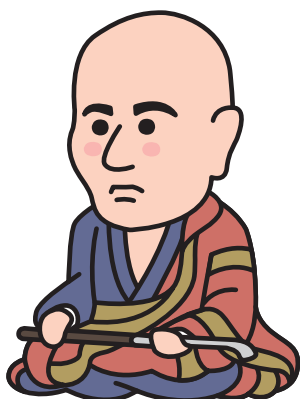
若狭の国に生まれた娘が、16歳のとき人魚の肉を食べました。すると、年を重ねても若く美しいままで、八百歳まで生きたといわれています。最後は、小浜男山にある空印寺の洞窟で入定しました。



02

行基 ぎょうき 【668年～749年】

奈良時代の僧。諸国を巡り仏法の教えを説き、民衆とともに数々の橋や堤を築き寺院を建てました。716年に羽賀寺(小浜)を創建。日本初の大僧正となり東大寺の大仏造立の責任者となりました。



03

良弁和尚 ろうべんおしょう 【689年～774年】

幼い頃、鷹にさらわれ奈良金鐘寺(東大寺の前身)で育てられて僧侶となります。東大寺の建立に尽力し、東大寺初代別当になりました。鶴の瀬の白石神社の前には、和尚生誕地の石碑があります。



04

坂上 田村麻呂 さかのうえのたむらまろ 【758年～811年】

平安初期の武将。蝦夷を征討し征夷大將軍となりました。蝦夷征伐道中の長田寺(小浜市中名田)に薬師如来像を安置したといわれています。また、国宝三重塔で有名な明通寺(小浜市門前)を806年に建てました。





05

二条院讃岐 にじょういんのさぬき 【1141 年～1217 年】

平安末期から鎌倉時代初期の女流歌人。二条天皇、のちに後鳥羽天皇に仕えました。若狭湾の「沖の石」を詠んだといわれる和歌は小倉百人一首に選ばれました。

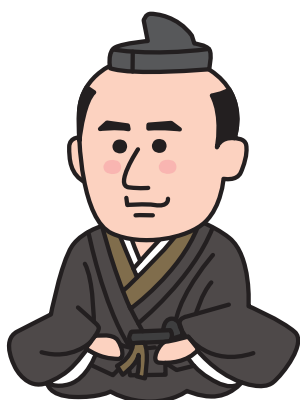


わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし

06

世阿弥 ぜあみ 【1363 年～1443 年】

室町時代の猿楽師。幼名は鬼夜叉。父の観阿弥と共に猿楽(現在の能)を大成、多くの作品を残しました。将軍足利義教により佐渡に流罪となり、小浜湊「津田の入り江」より船出しました。



07

一色 義貫 いっしきよしつら 【1400 年～1440 年】

室町時代の若狭・三河・丹後・山城の守護大名。勢力を拡大しますが、足利義教に警戒され、武田信栄により暗殺されました。廣峰神社鳥居根元には、一色義貫造立の文字が残されています。

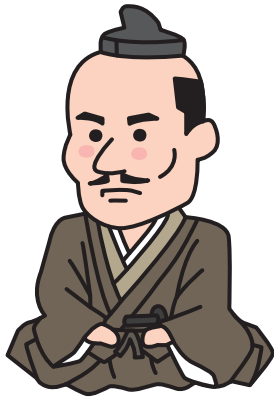


08

亜烈進卿 あれつしんけい 【1408 年～】

1408年、若狭の中湊浜に南蛮船が漂着。この船には亜烈進という首長一行が室町幕府の将軍に献上するための「象1頭、孔雀、オウム、そのほか献上品」が乗っていました。象は4代将軍足利義持に献上されました。





09



武田 信賢 たけだのぶかた 【1420年～1471年】

兄信栄より若狭守護職を継ぐ。父が支配していた本国安芸から国人を移すなど若狭武田氏の基礎を築きました。応仁の乱で東軍の副将を努めるなど武勇に優れた大男だったといわれています。

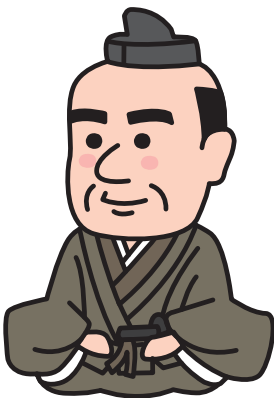
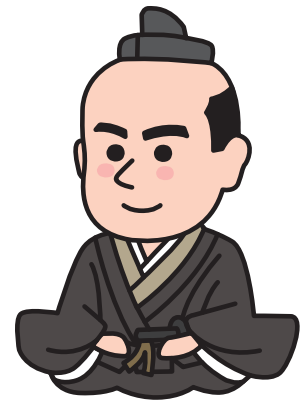


10



武田 信親 たけだのぶちか 【1458年～】

若狭武田氏の第4代当主。室町幕府第9代将軍・足利義尚の御相判衆に任じられました。死去の年代は1485年と1514年の2説があります。栖雲寺(小浜大原)を1482年に建てました。



11



武田 元信 たけだもとのぶ 【1461年～1521年】

若狭武田氏の第5代当主。兄信親はすでに亡く父国信の死により若狭守護職を継ぐ。和歌や故実などの公家文化に通じ、芸能文化面の発展に貢献しました。佛国寺(小浜市伏原)を1502年に建てました。

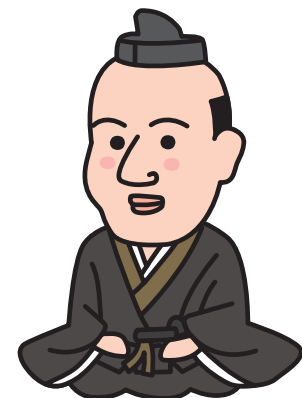


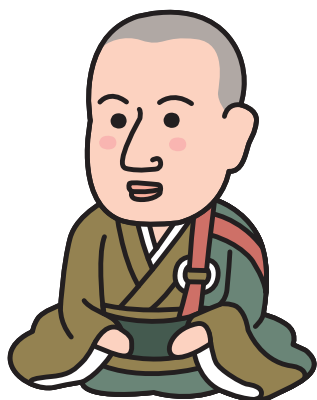
12



武田 元光 たけだもとみつ 【1494年～1551年】

若狭武田氏の第6代当主。父元信の出家により若狭国守護を継ぐ。後瀬山に城を築き守護館も山麓に移しました。細川高国の要請で京に出兵、大敗し近江へ逃げます。発心寺(小浜市伏原)を1522年に建てました。





13



潤甫 周玉 じゅんほしゅうぎよく【1503年～1549年】

5代元信の子。栖雲寺(小浜大原)を再興し、雲外寺(小浜市谷田部)を建てました。実隆から和歌の教えを受け、歌会や狂歌合を催しました。天文元年に栖雲寺で「孟子」の講釈会を開きました。

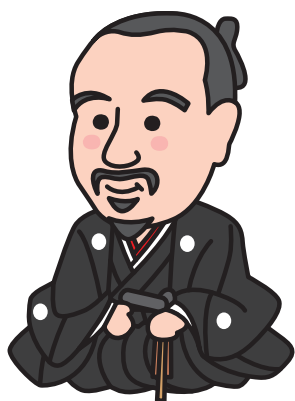


14



妙玄尼 みょうげんに【1529年～1625年】

大変な長寿な女性で、將軍家光が長寿にあやかりたいと妙玄尼の着物を欲したという逸話が残されています。妙玄寺を川越に建立、その後小浜に移りました。



15

丹羽 長秀 にわながひで【1535年～1585年】

安土桃山時代の武将。織田氏の家臣。信長の進める戦のほとんどに参加、各地を転戦した。信長死後は秀吉を支持。秀吉より若狭国を与えられ、後瀬山城の城郭の大規模な補強を行いました。

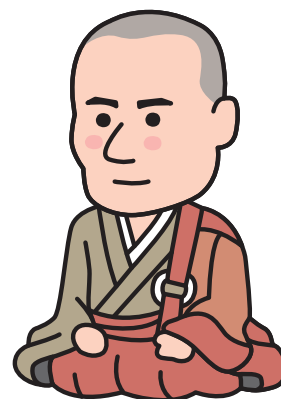


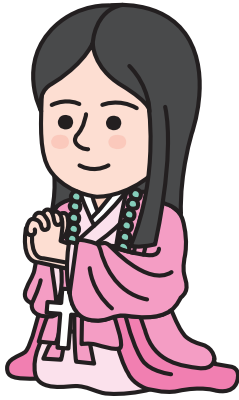
16



月甫 清光 がっぽせいこう【～1538年】

3代国信の弟。南禅寺仙館院の和漢聯句の会に列座しました。晩年は若狭に在って京都の三条西実隆と交流、和歌の指導を受けました。政治では武田元光を補佐していました。





17

京極マリア きょうごくまりあ 【1542年～1618年】

京極高次・竜子の母。敬虔なキリシタン。長男高次が領する若狭小浜にもたびたび足を運んだといわれています。

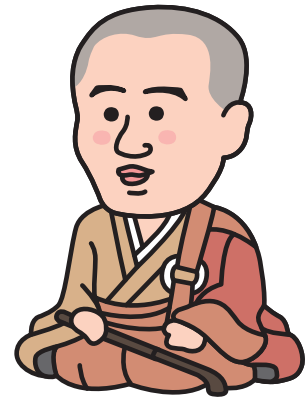


18



英甫 永雄 えいほえいゆう 【1547年～1602年】

臨済宗夢窓派の僧侶。父は6代信豊の弟です。建仁寺の文溪永忠に就いて学び、法を継ぎました。連句や和歌にすぐれ、近世狂歌の祖といわれています。



19

浅野 長吉 あさのながよし 【1547年～1611年】

豊臣秀吉に重用され若狭小浜藩主となりました。熊川の地が、交通と軍事において重要な場所であることから、ここに町奉行を置き、宿場町としての発展の基礎を築きました。晩年は長政を名乗りました。



20

京極 高次 きょうごくたかつぐ 【1563年～1609年】

安土桃山時代から江戸時代初期の武将。正室は常高院・お初。関ヶ原の戦いの功績により若狭小浜藩の藩主となりました。後瀬山城を廃し小浜城の築城と城下町の整備をしました。





21



常高院・お初 じょうこういん・おはつ 【1568年～1633年】

若狭小浜藩の藩主京極高次の正室。姉は豊臣秀吉の側室「茶々」妹は徳川秀忠正室「江」。小浜浅間にある常高寺は、お初の発願により建立されました。



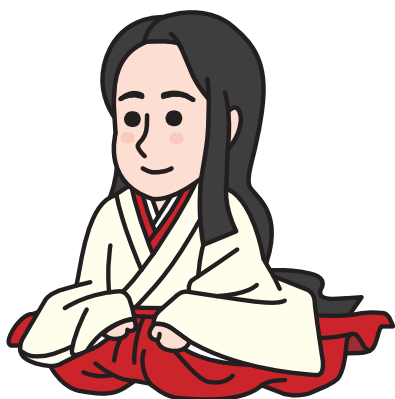
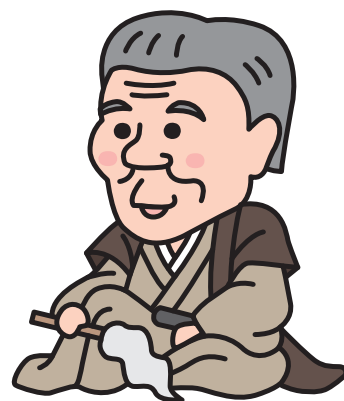
22

木下 勝俊 きのしたかつとし 【1569年～1649年】

江戸前期の武将・歌人。豊臣秀吉の正室北政所の甥。若狭小浜領主。細川幽斎に和歌を学び、清新自由な歌風で知られました。一時期はキリシタンでもあり、洗礼名はペテロと伝わります。



あらぬ世に身はふりはてて大空も 袖よりくもる初しぐれかな



23

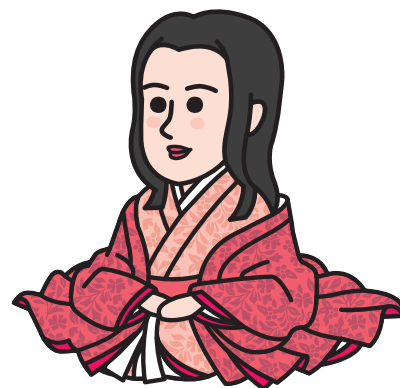
春日局 かすがのつぼね

明智光秀の家臣・斉藤利三の娘。家光の乳母となり、やがては大奥を取り仕切り、生涯にわたって家光に仕えた女性。新大夫を傍におき、とても可愛がりしました。

24

小少将 こしょうしょう

近江国高島郡出身。常高院（お初）の筆頭侍女。常高寺の朱印状をもらうために、新大夫を江戸に送り、自身は常高寺の留守を護りました。





25

新大夫 しんだゆう

常高院の次席侍女。酒井忠勝とも旧知の仲。江戸に渡り、家光・家綱公の前へ参上する機会を得て、朱印状を賜る念願を果たしました。書に優れ、今も書状が常高寺に残されています。

26

川崎 かわさき

常高院に仕えていた川崎六郎左衛門の娘。新大夫が春日局の依頼を受け、家綱の乳母を探しており、川崎を紹介しました。川崎は乳母を経て、やがて大奥大年寄になります。



27

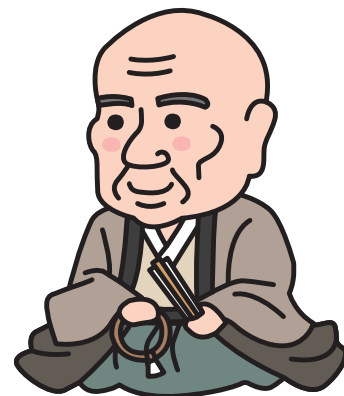
外山 とやま

川崎の娘。家綱の夫人に仕え、やがて大奥大年寄になりました。江戸城大奥の初期、常高寺に関わる女性で、江戸城大奥の要職に就いていました。

28

酒井 忠勝 さかいただかつ 【1587年～1662年】

若狭小浜藩の藩主。京極氏の領地を引き継ぎ、小浜城を完成させ小浜藩の政治の基礎を整えました。三代徳川家光の右腕といわれ、大老をつとめました。





29



京極 忠高 きょうごくただたか 【1593 年～1637 年】

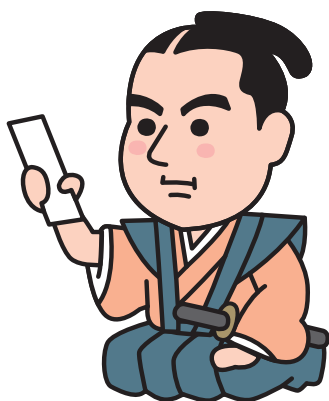
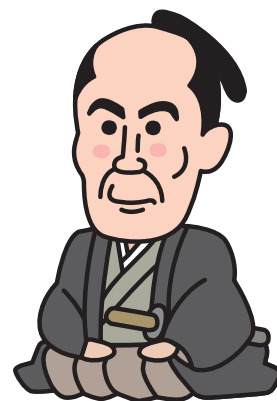
京極高次の長男。小浜～熊川の間を流れる遠敷川の改修をし、船が往来できるようにしました。その後、松江に転封。わずか3年で死去しましたが、若狭土手と呼ばれる大土手を作り、功績を残しました。



30

行方 久兵衛 なめかたきゅうべえ 【1616 年～1686 年】

江戸時代前期の小浜藩士。1662年の大地震で水没した三方五湖周辺地域の水害復旧のために困難な治水事業を行いました。工事により水位が下がり、約400石もの新田が出来ました。



31

松木 庄左衛門 まつのきしょうざえもん 【1625 年～1652 年】

江戸時代前期、若狭の農民は重い大豆年貢に苦しんでいました。若き庄屋の庄左衛門は年貢軽減を直訴、一命を捨てて悲願を達成しました。その正義ある行動が語り継がれ、彼を祀った松木神社が建立されました。

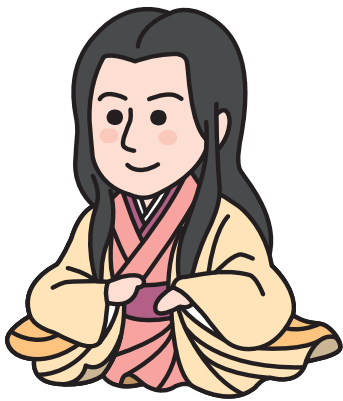


32

松浦 三十郎 まつうらさんじゅうろう

小浜藩の御用塗師。豪商組屋六郎佐衛門が国外の漆塗盆を藩主酒井忠勝公に献上、三十郎がこれをヒントに制作したことが「若狭塗」の始まりです。小浜藩の財政経済の基幹産業として発展しました。





33

京極 竜子 きょうごくたつこ 【～1634年】

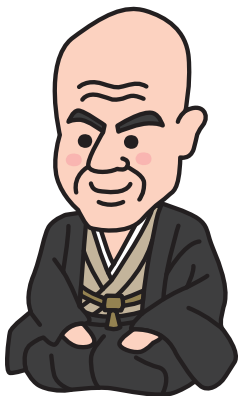
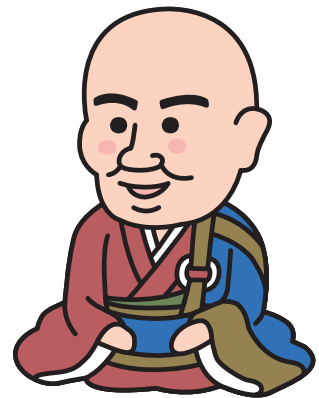
京極マリアの娘。若狭武田氏・武田元明の妻。本能寺の変の後、若狭武田氏は途絶えます。その後、豊臣秀吉の側室となり松の丸殿と呼ばれました。とても美しい女性だったそうです。



34

面山 和尚 めんざんおしょう 【1683年～1769年】

江戸中期の曹洞宗の名僧。16歳で僧侶となり、江戸で学びました。空印寺(小浜男山)などに歴住し永福庵(奥田縄)に退棲。多数の著述があります。丁寧な提唱から「婆婆面山」と呼ばれていました。



35

木崎 惺窓 きざきてきそう 【1689年～1766年】

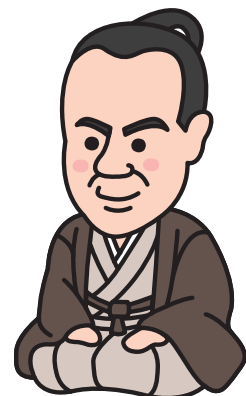
小浜の町人学者。領内の古老からの聞き取りや古い記録を集めて、郷土史誌「拾椎雑話」を完成。庶民のくらしを書き留めた内容は豊富で、江戸期の若狭を知る貴重な史料と高く評価されています。

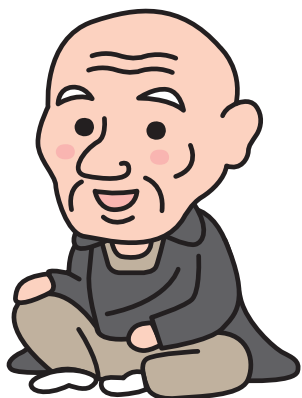


36

木崎 雅興 きざきまさおき 【1718年～1798年】

小浜の歌人。45年の歳月をかけて「大和物語虚静抄」を完成させました。町老として町政の要職にある一方、郷土の子弟に和歌を教え「大和物語」を講じました。大叔父は木崎惺窓。





37

杉田 玄白 すぎたげんぱく 【1733 年～ 1817 年】

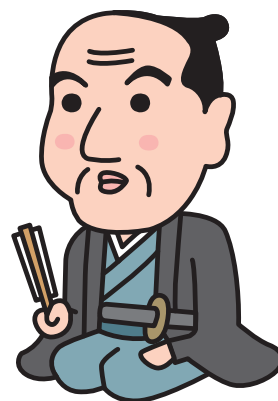
江戸時代の医師・蘭学者。小浜藩医の子として生まれました。オランダ語の書物を困難の末、翻訳し「解体新書」を刊行しました。この功績により日本の医学は大きく進歩しました。



38

中川 淳庵 なかがわじゅんなん 【1739 年～ 1786 年】

江戸時代の医師・本草学者・蘭学者。小浜藩医の子として生まれ、本草学・蘭学を学ぶ。杉田玄白らとオランダの医学書を翻訳し「解体新書」を刊行。日本の医学の進歩に貢献しました。



39

酒井 忠貫 さかいただつら 【1752 年～ 1806 年】

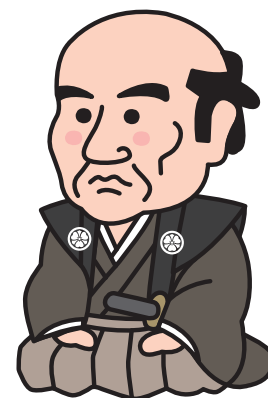
若狭小浜藩9代目藩主。山崎闇斎を師とする崎門学派の講師を招いて藩校順造館を設立し、家臣の教育に力を注ぎました。



40

酒井 伊織 さかいいおり

酒井家の家老、筆頭総代。小浜藩主酒井忠勝の弟。江戸で徳川家光を補佐し、大老をつとめる酒井忠勝に代わり、小浜藩を采配しました。この辺りが酒井伊織下屋敷でした。





41

綱女 つなじょ 【1755 年～1769 年】

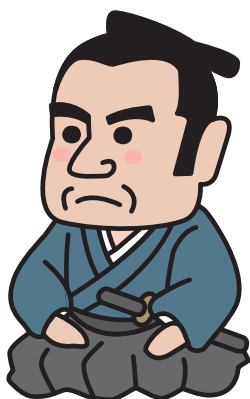
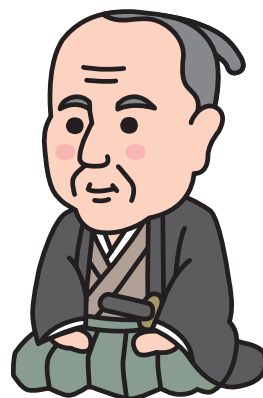
西津の漁夫の娘。家は貧しく松見茂太夫の家に子守として奉公。幼児義方を守り中に狂犬に襲われ、命を投げ出して子を守りました。小浜藩はその勇気と忠誠心を讃えました。



42

伴 信友 ばんのぶとも 【1773 年～1846 年】

江戸末期の国学者。竹原の山岸家に生まれ、藩士伴信当の養子になりました。本居宣長の養子・本居大平に国学を学び、のちに「天保の国学の四大人」と呼ばれました。



43

浅利 又七郎 あさりまたしちろう 【1778 年～1853 年】

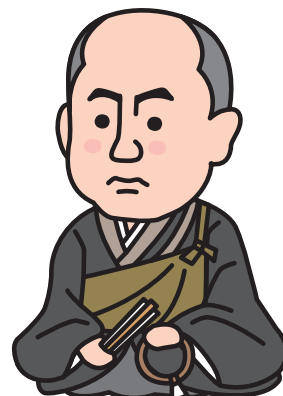
本名は浅利義信。幕末の剣豪。小浜藩江戸屋敷の剣術指南を勤めました。一時期、千葉周作が道場を継ぎましたが物別れとなります。突きの名手といわれていました。

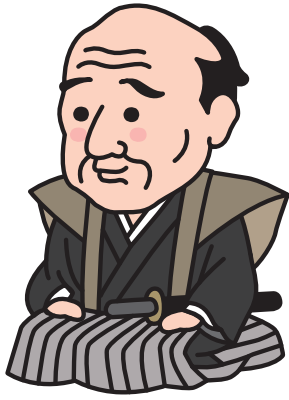


44

東条 義門 とうじょうぎもん 【1786 年～1843 年】

江戸時代の僧・国語学者。妙玄寺に生まれる。京都の学校で学び、後に妙玄寺を継ぎ住職となりました。国語研究に打ち込み、多くの著書を発表しました。今日の国語の基礎を築いた一人です。





45

酒井 忠義 さかいただあき 【1813 年～1873 年】

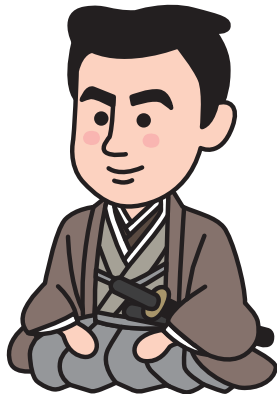
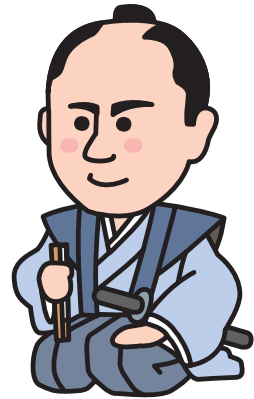
幕末維新期の小浜藩主。寺社奉行を経て京都所司代を勤める。大老井伊直弼による安政の大獄に協力。和宮降嫁など公武合体にも尽力した。版籍奉還により小浜藩知事となりました。



46

梅田 雲浜 うめだうんぴん 【1815 年～1859 年】

幕末の志士・元小浜藩士。小浜藩の政治に意見を述べ藩を追放されました。尊皇攘夷の考えを説き、倒幕運動を推進しました。



47

桂 小五郎 かつらこごろう 【1833 年～1877 年】

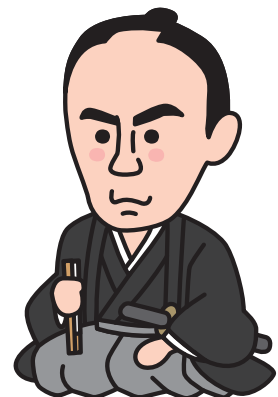
幕末より明治初期に活躍した「維新三傑」の一人。小浜藩士の娘、京都の芸妓「幾松」と知り合いました。明治維新後、木戸孝允と改名し「幾松」と結婚。版籍奉還、廃藩置県に尽力しました。

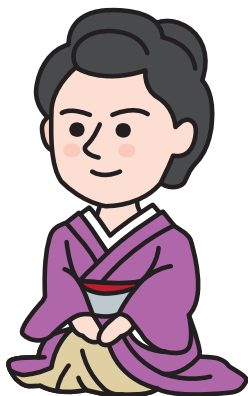


48

山川 武直 やまかわたけなお 【1834 年～1908 年】

幕末の小浜藩士。歌人山川登美子の父。酒井忠義の側用人を勤め、朝廷と幕府、政府軍と小浜藩との交渉役として奔走した。廃藩後は第二十五国立銀行(小浜)の頭取を務めました。





49

幾松・木戸 松子 いくまつ・きどまつこ 【1843年～1886年】

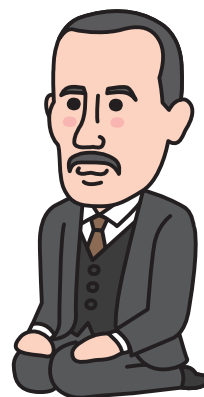
小浜藩士の娘として生まれ、京都三本木の芸子になります。美しく芸にも秀でて「幾松」を襲名。この頃、桂小五郎(木戸孝允)と出会います。新撰組の襲撃の際は、小五郎の身を守るなど献身的に尽くし、二人は婚姻しました。



50

和田 維四郎 わだつなしろう 【1856年～1920年】

小浜藩の貢進生(特待生)として東京で鉱物学を学ぶ。地質調査の必要性を政府に説き、地質調査所所長・東京大学教授・八幡製作所長官を歴任。日本の近代鉱物学、製鉄業近代化の基礎をつくりました。



51

山口 嘉七 やまぐちかしち 【1857年～1932年】

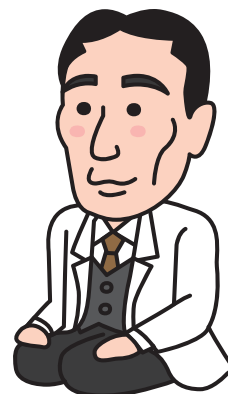
昭和時代前期の政治家・実業家。小浜線の全線開通、南北両川の改修工事を実現。その他、私財をはたいて、現在の小浜市の礎を築きました。晩年「ひげさん」と呼ばれ慕われました。

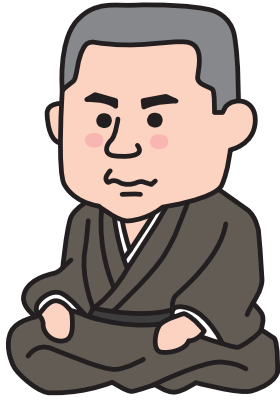


52

平井 政澄 ひらいまさかつ 【1865年～1950年】

小浜市竹原生まれ。父は小浜藩医。東京帝国大学医学部を首席で卒業。軍医最高位の軍医総監になった後、日本赤十字社病院の院長を務めました。患者の顔を見ただけで悪いところを当てたといいます。





53

西田 當百 にしだとうひゃく 【1871 年～1944 年】

川柳作家。小浜今宮で生まれ28歳で大阪毎日新聞社にはいる。勤務のかたわら川柳をはじめ、番傘川柳社を設立しました。

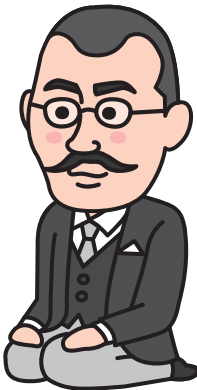
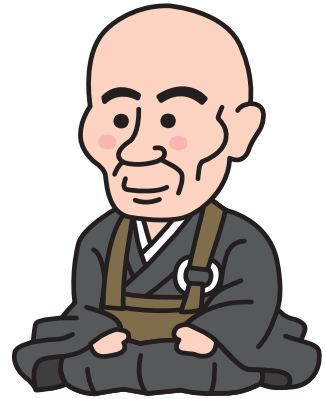


じょうかんや
上燭屋へいへいへいとさからはず

54

原田 祖岳 はらだそがく 【1871年～1961年】

曹洞宗の僧侶。駒澤大学教授。小浜市に生まれ曹洞宗の寺院に入りました。曹洞宗、臨済宗の禅を兼修。発心寺(小浜市伏原)・智源寺(京都)の住職となり修行僧を厳格に指導しました。



55

田中 文蔵 たなかぶんぞう 【1874 年～1941 年】

小浜市竹原生まれ。東京法学院(現中央大学)を優秀な成績で卒業。三井物産に入社後は、人事および文書の管理に専念し、取締役になりました。達筆家で驚くほどの速記能力がありました。



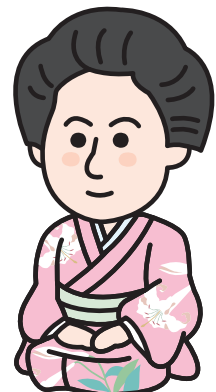
56

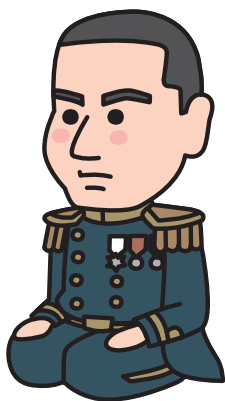
山川 登美子 やまかわとみこ 【1879 年～1909 年】

明治時代の歌人。生家は小浜藩酒井家の重臣山川家。与謝野鉄幹が主宰する文芸雑誌「明星」に参加し注目され活躍しました。



髪ながき 少女とうまれ しろ百合に 額は伏せつつ 君をこそ思へ





57

佐久間 勉 さくまつとむ 【1879年～1910年】

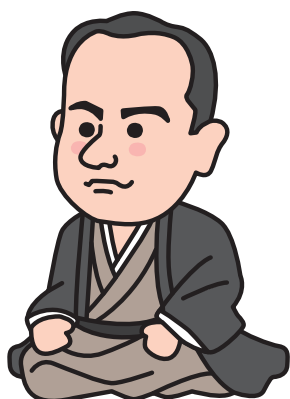
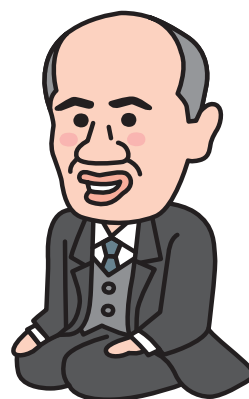
海軍軍人。小浜尋常中学校を経て海軍兵学校を卒業。第六潜水艇隊艇長に就任し潜航訓練中に殉職。艇内から遺書が発見されその責任感と思いやりの溢れた行動が国内外に大きな感銘を与えました。



58

上田 三平 うえださんぺい 【1881年～1950年】

小浜市羽賀出身。平城宮跡や登呂遺跡などの発掘に携わり、歴史の解明に考古学を取り入れる手法の先駆者。全国百以上の国指定史跡の記録に名を刻んでいます。現場叩き上げの考古学者。



59

尾崎 放哉 おざきほうさい 【1885年～1926】

明治から大正時代の俳人。荻原井泉水の主宰する俳句雑誌「層雲」に参加して自由律俳句の代表的俳人となりました。1925年小浜常高寺の寺男として住んでいた期間があります。

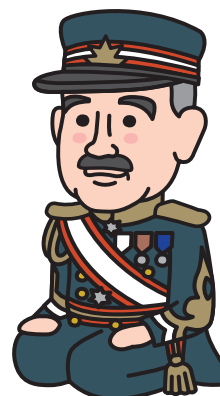


背を汽車通る草ひく顔をあげず

60

儀峨 徹二 ぎがてつじ 【1885年～1965年】

日本陸軍の中将。小浜中学校卒。航空機の実用化に深く関わり、昭和初期からは飛行学校長を歴任。性能向上とパイロットの養成、指揮官として生涯を捧げ、日本航空界発展の基礎を築きました。





61

大木 吉太郎 おおききちたろう 【1887 年～1971 年】

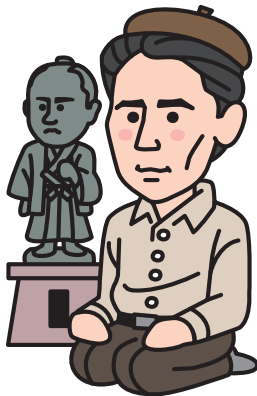
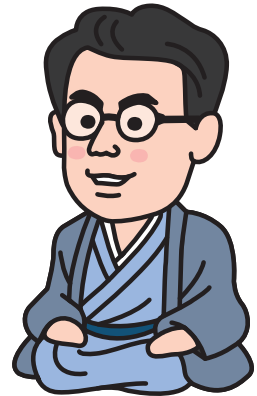
奈良出身の宮大工・建築家。関東大震災後、古社寺や伝統建築の調査、修復に尽力。奈良基督教会を設計し和風教会堂という様式を生み出しました。昭和6年の河川改修に伴い、聖ルカ教会を改築しました。



62

山本和夫 やまもとかずお 【1907 年～1996 年】

小浜市松永生まれ。昭和・平成期の詩人。「万年青年」を自称され、東京では幼稚園の園長を務めていました。戦後は『子どもの伝記全集』などの児童文学作家として活躍。現在も若狭小浜では幾つもの校歌・唱歌が歌い続けられています。



63

松木 庄吉 まつきしょうきち 【1914 年～1944 年】

若狭町生まれ、おおい町本郷育ちの彫刻家。家業の石材店で石工として励みました。上京し文展で特選を受賞しましたが、召集を受けニューギニア島で戦死。梅田雲浜像など多くの作品が小浜市に遺っています。



64

梅澤 濱夫 うめざわはまお 【1914 年～1986 年】

雲浜村竹原生まれ。代々医者の家系に育ち、東京帝国大学医学部に進学。日本初のペニシリンの実用化に成功。また結核の特効薬を発見、抗生物質を発展させるなど多くの患者を救いました。

